

授業者に 訊く——②

しとしと肌寒い秋の雨が降る中、鹿児島県鹿児島市を訪ねました。1年生の選択授業2時間は、手遊びあり、男子のソロパートありの合唱から始まりました。生き生きと音を楽しみ味わう様子をお届けします。

授業者：盛山春樹（鹿児島県立武岡台高等学校）



音楽のスイッチを押す

Vent(以下V)：生徒たちがピアノの周りに集まって和気あいあいと先生の伴奏で歌ったり、楽しそうにギターを弾いたりしている様子が印象的でした。何か意識していらっしゃることはありますか？

盛山：最初にこの『つどい』*を使うことです。いろいろな悩みを抱えている生徒もいるだろうし、テストで低い点数を取って暗くなっていたりする生徒もいるかもしれません。この歌集はしっかり歌うことの目的と

しているのではなく、授業に来たらまず歌って音楽のスイッチを押そうという理念なんです。

V：特に発声練習せずに歌っていました。今日はギターの授業ですが、歌唱の授業のときは、『つどい』のあとに発声練習をなさるのですか？

盛山：歌唱のときには『つどい』は使いません。音楽室に来たらまず体操や発声練習などをして、日本歌曲やドイツ歌曲、イタリア歌曲を歌います。

楽しみながら学ぶ

盛山：『つどい』のテーマに「たくさんの歌を知ろう」というものがありまして、一度歌ったらもう次回は歌わないという決まりにしています。ですから、曲の横には何月何日に歌ったと書きます。そうすると、もうこの曲は歌えない。

V：毎回初見で歌っているということですか？

盛山：はい。だいたいが知っている曲だということもありますが、取り上げる曲を知らない生徒が多いときには、反復しながら歌います。『卒業写真』がそんな感じでしたね。小学校や幼稚園で習ったことのある曲や民謡なども入っているので、広く歌を知ることができます。

V：歌いながら、先生が間奏のところで曲について一言説明を入れたり、発声についてのアドバイスをしたりするのを見て、楽しみながらも無意識のうちに指導が行き届いているのだなあと感動しました。

盛山：ありがとうございます。松任谷由実の話で「おっ！」と生徒の気を惹き付けたり、クリスマスの曲は英語で歌ってみようかと提案したり。いろいろな曲を積み重ね



音楽を通して自分を表現する

聞き手：ヴァン編集部

ることで、リピートなどの記号にも自分たちで気付くことができる…そういう時間になればと思っています。

V：「楽典」として学ぶよりも、実際に歌いながら覚えていくのですね。

盛山：また、『つどい』の楽譜に書かれているコードを見て根音を言わせることもあります。『こいのぼり』の冒頭はずっとCですが、その1拍目に「ド」と言わせる…ゲーム感覚です。

V：楽しいですね。「当たった！」とか「あっ、違った！」とか。

盛山：「フルコンボを目指してやってくれ」とか言っています(笑)。

V：いろいろな仕掛けがありますね。今日は『つどい』で20分ぐらい時間を使われていたので、常時活動としては長くて驚きましたが、利用しない手はありませんね。

盛山：「ピアノの周囲50cm以内に入りなさい」とみんなを集めて、わいわい言いながらするのが楽しいんです。きれいな声で歌うとか、大きな声を出すこととは違いますが、みんなで歌うということの意味もそこにあるような気がしています。

男子はタブ譜、女子は五線譜のほうが読みやすい

V：今日のギターの授業は何時間目になりますか？

盛山：6時間目です。

V：6時間目でここまで弾けるようになるのですね！次週のテストと『夢の中へ』を終えれば、ギター終了…。

盛山：そうですね、ギターの学習はだいたい8～9時間ぐらいの扱いです。集中して取り組みます。

V：生徒たちの読譜力についてはいかがですか？プリントは五線譜とタブ譜を併記したものを使っていらっしゃいました。

盛山：男子はタブ譜のほうが読みやすいようです。女子は割に五線譜を読めるので、ギターの音階を覚えたら五線譜のほうが見やすいという生徒もいます。しかしギターの学習なので、タブ譜を読めるようになってほしいと思っています。読譜力はやはり男女差が大きくて、本格的ではないけれど片手だったら初見でもピアノを弾ける女子生徒は多いようです。ただ男子は…特に今日のクラスは男女差が激しくて。男子は置き去りになってしまって、ギターは男女混合のグループ分けにしました。

V：男子7人、女子12人のクラスで、全グループうまく男女が交ざっていました。男子だけだとふざけてしまうからではなく、純粋にその差を埋めるための工夫だったのですね。

盛山：はい。休み時間もずっとギターを弾いているような真面目な生徒が多いので、ほったらかしにしても遊んでしまうことはほとんどありません。



○もりやま・はるき
鹿児島県立武岡台高等学校教諭

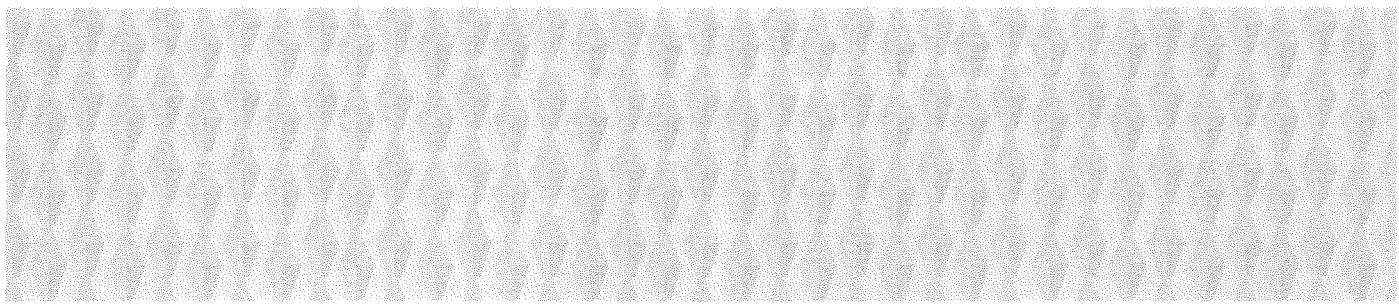
V：すごいですね。2時間授業が続くと、どうしてもだらけてしまう瞬間がありそうですが…。

盛山：そういう面では、生徒に相当助けられています。学校全体の雰囲気がよくて、先生も生徒も一緒に活動しているという校風です。本校では、世界といろいろな交流ができ、さまざまな文化に共感できる、「共に生きる」ことのできる生徒の育成を目指しています。音楽室にも貼ってありますが「共に奏でん」など、よく「共に」という表現を使います。

V：それが授業の雰囲気にも表れているのですね。個人練習では、男子どうしで教え合う様子も見られました。男子のやる気を引き出すコツはありますか？

盛山：それは萎縮させないようにクラスに男子がたくさんいることだと思います。1年生の芸術選択を決める時点で、こちらからクラス編成の希望を出しておきます。「女子クラスを2つつくってください」とお願いすると、それ以外のクラスにはおのずと男子が集まります。





音が取れない生徒にも、がんばったかいがあると思わせる

V: 生徒さんたちが音楽の授業でいちばん得意なのは何ですか？

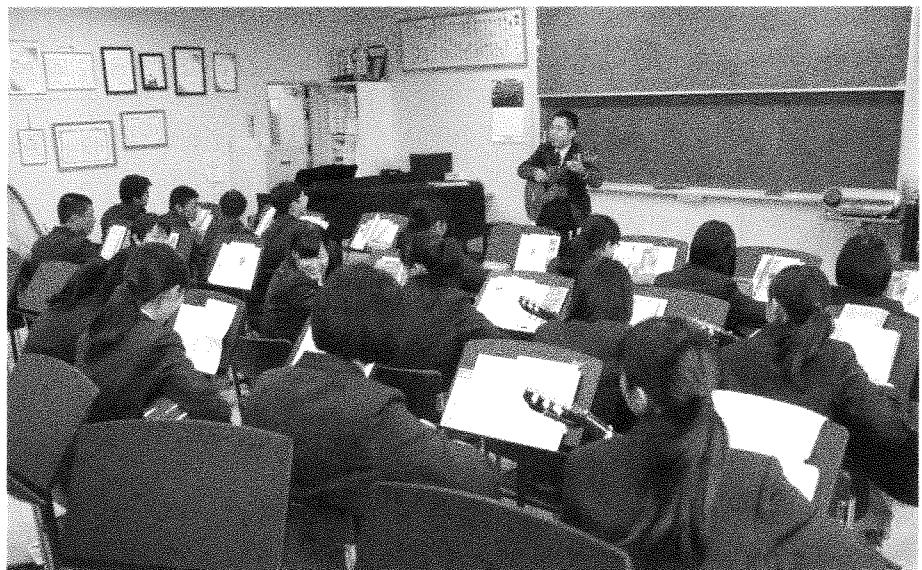
盛山: やっぱり歌です。自分の授業について、1年間を振り返って何がいちばんよかったですか、どういったものを授業で続けてほしいかななどのアンケートを取ると、ダントツで『つどい』の時間がよかったですという回答が多いんです。

V: 年間では、やはり歌の時間が多いのですか？

盛山: 1学期は発声などを含めて歌曲を中心に扱い、独唱までできるように活動します。そして2学期のメインはギター、3学期は箏の学習ですから、どちらかというと器楽が多いのかもしれません。

V: 逆にここは難しいと感じていらっしゃることはありますか？

盛山: やはり、楽譜を読むのが苦手な生徒を、楽しんでいる周りの生徒とどのようになじませていくかということです。1学期の



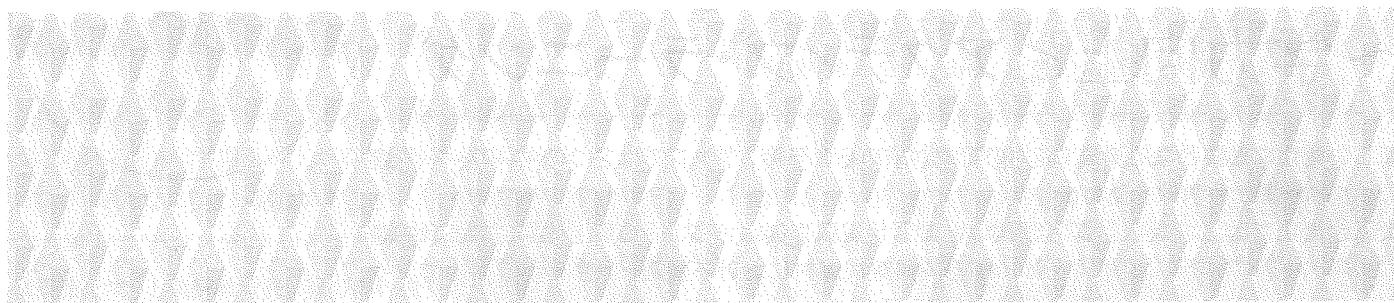
歌唱の授業では、みんなの前で独唱をするんです。大きな目標としては、音楽を通して自分を表現することですが…音程がうまく取れない生徒にも、そのまま歌われます。それがほんとうによいことかどうかは、僕自身もまだ答えを出せていないのですが…。恥をかくことになるかもとか、いじめられるようなことがあるかもといった心

配もあります。でも「音程の取れない生徒もいるんだ」という認識をもったり、そういうときに周りがどういう行動をとればよいのかという学びにつながればいいなと思います。…とは言うものの、音の取れない生徒にがんばってよかったなと思わせるのは難しいかなあと思っています。

V: どういったフォローをなさいますか？ クスクス笑いが起きてしまうこともあるかと思います。

盛山: ありますね。そこは最後の講評で、「全体としてはこうだったね。彼も一生懸命やって最後まで歌いきったことはすばらしかったよね」などと言うようにしています。音の取れない生徒には「最初はこうだったけれど、ここがよくなかったよ」と伸びたことを評価する。よくなった点を取り上げることで、がんばったかいがあると思ってくれると信じています。





響きを大切に、渾身の1音で

V:『河は呼んでいる』を教材として選ばれた理由は何でしょうか？

盛山：単純に教科書に載っていたからです。今年初めて扱いました。

V:『夢の中へ』は定番曲ですか…。

盛山：コードの種類が少ないということと、G-durだから扱いやすいかなと思いました。

V: 最近FだけではなくGも押さえにくいと聞きますが、実際にはいかがですか？

盛山：Gは押さえにくいようです。指が開かないのか、手首が固まってしまっているからなのか…Cも大変で。ですから「指を替えていいよ」「角度を変えてみたら」などと一つ一つ指導しています。

V: ストロークの練習を聴いていると、押さえやすいコードのときには如実に音が大きく、きれいでしたね。

盛山：それもいいですよね。「このコードきれい！」って思ってくれたらいいな。

V: 先生は授業中に何度も「響きを大切にして」とおっしゃっていました。響きを大切にすることは、授業の中でどういう位置付けになるのでしょうか？

盛山：僕の授業は、どちらかというと技術面に重きを置いていると思っているので、生徒も「上手になりたい」とか「テストでいい点数を取るためにこれをクリアしないといけない」という意識になります。ですから、音を味わうことやギター本来の響きに注目させたいというか。たった1音だけを鳴らすときにも、味わえるものがあると思います。

V: シーンとなるまで、しっかりと最後の余韻まで聞くことや、きちんと静かな状態か

ら音を鳴らすという習慣は、集中力の面からもたいへんよい活動だと思いました。状態が整わないまま音を出してしまって、そういう音楽になってしまうと思いますので。

盛山：2クラス合同で30人ぐらいのクラスでも「渾身の1音で」と言うと音がそろいます。例えば違う弦を触ってしまうと目立つてしまうので、「きちんと出よう」「ちゃんと聴こう」とする気持ちが生まれ、合わせることにつながります。おもしろいですよ。ギターや箏だからこそ味わえることです。

V: そうですね。今日はほんとうにありがとうございました！

授業の流れ

項目	内容
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○『高校生の歌集 つどい』を歌う ○校歌を歌う
展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ギターを弾く
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○次時の予告



本村誠人 先生
鹿児島県立武岡台高等学校校長